【書評 2】

延広真治著『落語はいかにして形成されたか』

長島 弘明

芸能と文学との距離は、時に近く、時にまた遠い。この摑みどころのない距離が、芸能の研究者を甚だ悩ませる。特に、過去の芸能を対象とした研究におけるや、芸能の最も重要な部分をしめる音声や仕草などの身体的な要素（聴覚的・視覚的要素）も、文字文献によらざるを得ないという、ほとんど絶望的な困難がある一方で、本来芸能においてはその一要素に過ぎない文字化された詞章や台本が、文字化されているという、まさにその理由によって、文学として読めてしまう—文学以外の何物でもないと錯覚してしまう—危険性があるからである。

例えば、「舌耕文学（文芸）」という語。「舌耕」と「文学」の語の間には、「芸能」と「文学」を隔てている、そうした曖昧でしかも明確な距離が同じく横たわっているが、両者を合した「舌耕文学」の語が、有効な文学用語になるか、「芸能」と「文学」の本質的な関係についての省察を覆い隠してしまう胡散臭い用語となるかは、それを用いる研究者の、あるいは「舌耕文学」研究を進める研究者の自覚に係っていたといってよい。「舌耕文学」の語も、今やすっかり学界で市民権を得たといってよいと思うが、その間には、本書の著者である延広氏をはじめとする多くの研究者の努力があった。

本書は、江戸落語に関する著者の多くの論考の中から、「江戸落語中興の祖」といわれる烏亭焉馬についての論考を中心として、近世後期の江戸落語成立期に関する諸論を選び、一書としたものである。ここに初めて江戸落語草創期の精確な見取図が描かれ、その本質が明らかとなった。本書の成果は、一言でいうならば、「舌耕文学」たる落語に文献実証の方法で立ち向かい、それを極限まで推し進めたところにある。著者の博引傍証は、つとに定評のあるところであるが、それは単なる未知の資料の引用ではなく、入念な資料吟味に裏打ちされている。例えば、本書で度々引用される三馬の『落話会刷画帖』（従来『落話中興来由』と呼ばれてきたもの、この妥当な呼称の復活も著者による）は既知の資料であるが、舌耕の徒と極めて親しい三馬とて、つい安易に信用しがちな注記についても、他資料との比較考量を経て、あるいは時に三馬の閲歴まで勘案され、いちいちの注記の信憑性が個別に検討された上で、慎重に引用されている。しかも当然のことながら、それらの文献資料群を（『三笑亭可楽自筆小咄集』のごときものさえも）、決して演芸としての落語そのものと同一視したり、軽率に結び付けたりはしていない。三笑亭可楽や林屋正蔵の芸風を論じると

ころでも、文献資料をギリギリの線まで読み込むが、矩を踰ることがない。記載資料の有効線と限界を著者は熟知している。

やや前後したが、本書の構成について一言すれば、まず「烏亭焉馬」の章が巻頭に据えられ（本章は「下町派の講頭」「江戸落語中興の祖」の二節から成る）、次にⅠとして「『太平楽巻物』」「咄の会」の二章があり、さらにⅡとして「三笑亭可楽」「林屋正蔵」の二章が続き、巻軸に「付　翻刻『太平楽巻物』」が置かれている（「付」とあれど、この翻刻をⅠの「『太平楽巻物』」の章の後ろに位置させなかった著者の心を汲み取るべきか）。いうまでもなく、烏亭焉馬中心の構成である。本書の各章と初出時の論考を比較すると、全体にわたって細心の加筆・推敲がなされている。叢書の一冊としての性格を考慮し、平易な文章に書き改められ、専門研究者は別として、一般読者には煩瑣なものに感じられることもあろう一々の考証過程は要を得たものに省略され、各章の有機的なつながりをつけるための考慮が、随所に払われている。しかも初出論考の学問的な水準は保たれ、細部にはその後の研究成果を盛り込んでいる。余談になるが、過年、著者に、Ⅰの「『太平楽巻物』」の章の元となった雑誌論考を恩借したことがあるが、その論考の余白・行間には、びっしりと補訂や、その論文発表後に書かれた他の研究者の関係論文（舌耕文学の研究のみにとどまらず、著者の論文中の片言隻句に関係するあらゆる分野の）の抜き書きが書き込まれているのを眼にして、物をゆるがせにしないその態度に打たれた覚えがある。

著者には、本書と対になるべき論考として「烏亭焉馬年譜」（続稿中）がある。完成の暁には、年譜形式の伝記研究の範となることを疑い得ない、詳細を極めた年譜である。そのエッセンスが、本書巻頭の「烏亭焉馬」であるが、焉馬年譜の一日も早い完成を願ってやまない。本書や続稿中の年譜によって、焉馬は復権した。それは単に一戯作者の復権にとどまらない。あるいは、江戸落語の復権にもとどまらぬ。大田南畝と並ぶ、近世後期の江戸の文化という磁場の、一方の極の発見であって、今後、江戸文化を支えた様々なサークルや江戸文化の質そのものの、焉馬を中心とした再検討を促すことになろう。

なお、本書の卓抜な成果にたいして、昭和六十一年度のサントリー学芸賞が授与された。

著者は、元名古屋大学教養部教官。現東京大学教養学部助教授。

（昭和六十一年十二月、平凡社、一九〇〇円）

〈名古屋大学助教授〉